

琉球大学学術リポジトリ

青少年のImperative needsについて-青少年指導の社会心理学的方向づけ-

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2011-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 文沢, 義永 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19452

青少年の Imperative needs について

—青少年指導の社会心理学的方向づけ*

文 沢 義 永**

- I 序
- II Imperative needs を考察する背景
- III 類似概念の考察
- IV 青少年の Imperative needs
- V 討 論
- VI 結 語

I 序

従来、青年心理学において青少年の心理的な特質及び彼等が直面する多くの諸問題を考察する場合、それらの包括的な纏め方として、青少年の Specific problems (Cole, L.) とか Characteristic needs (Kuhlen, R.G.) とか Developmental tasks (Havighurst, R.J.) などの用語が使用されている。また一般的な行動の根源として Basic needs が取り上げられていることは衆知の通りである。

これらの概念ないし用語は、後述するように、夫々心理学的に制約された意味を持つているしこれらだけで果して青少年の精神構造や行動の根源を理解し解釈することができるかという別の問題を残しているように思われる。そもそも心理学に関する法則は唯一つの学説でだけ説明できるとは限らず、異つた方向からの学説が有効な場合もある。黒田も指摘するように、客観的な事実に即した考察が通念であつても価値的な見方も忘れてはならず、青年期の行動を考察する場合に心理学的操作をもつてのみならず、思想をもつて接せざるを得ないこともある。

このような観点に立つ時、バーナード (Bernard, H. W.) がその著書の中で殊更に取り上げている青少年の Imperative needs の考察は、心理学的な立場からも教育的な立場からも興味深い問題を含んでいるように思われる。ところが今日の日本の青年心理学書にはこのような考えは見当たらないようであるが、昭和38年に東京で開かれた青年心理研究者懇話会において、

- 今日までの青年心理学は世の中にどのような貢献をしてきたか
- 今日の日本の青少年はどのように生活しているか
- 日本の青年心理学は何をしているか
- 日本の青年心理学は今後どのように進むべきであるか

というような問題が真剣に討議されたこともある折柄、Bernard が紹介した Imperative needs の問題は近い将来日本の学界でも論議されることが予想されるし、また論議されるべきであると考えられる。以下この問題について考察することにしよう。

* On the Imperative Needs of Adolescents—Socio-psychological Orientation to the Guidance of Adolescents.

** by Yoshinaga Fumizawa

Ⅱ Imperative needs を考察する背景

1. 青年心理学研究上の二つの観点

一般的に考えるならば学問全体の研究目的は何かということにもなるであろうが、青年期に関する研究において客観的事実（法則）の究明を主とするか、現実改善への漸進的実践を強調するか、ということをも最初に考えて見る必要がある。勿論、両者の並立や統一を理念としながらも、前者に強く傾く人もあろうし、後者に重点をおく人もあろうし、また両者の統一を実践する人もあるであろう。

この問題は、青年心理学を「青年及びその集団の精神的な構造や発達を研究する科学」と見るか、「青年期にある個人及び集団の直面する諸問題を心理学的に研究する学問」と見るか、という問題と関連する。すなわち、前者は研究対象の事実究明を重視し、後者は問題解決の健全な展開を重視すると見てよいであろう。一方は精神的に成熟化する過程にある事実以外のことは問題にしたがらないのに反し、他方は課題の選択・解釈・利用法に特別な考慮を払うだろうし、また青年個人の内部的力と同時に外部的力ないし文化的環境条件への配慮も怠らないであろう。前者の観点からすれば **Imperative needs** は左程重要な研究対象とはされ難いが、後者の観点からは過去—現在—未来という広い視野の中で「現在の青年」を眺めるから教育的に不可欠な研究課題であると言えることができる。しかし前者の立場であつても、青年の精神的な構造や発達の事実を明らかにしてその事実の根源や規定要因を研究するならば、文化的影響力の所在とその重要性とに気付くであろう。その場合、文化的影響力の捉え方や解釈の仕方に研究者自身の思想ないし哲学があるか否かが反映してくる。

従つて、両者何れの観点に立つとしても青少年の **Imperative needs** という問題は、その強調の仕方に幾らかの差異があるにしても、共通に取り上げられ考察される青年心理学のテーマの一つであることになる。

2. Needs の意味するもの

リンダグレン (Lindgren, H. C.) によれば、Needs はある種の充足活動を通して変形させ・軽減させ・除去させられるまで存続する緊張または不均衡の状態であると定義される。そして Needs は、その個体が意識していると否とに拘らず、死活に関わるもの、必要欠くべからざるもの、避けられぬもの、あるいは緊急に必要とされているものである。ある種の Needs は、それが充足されないため死に至ることもあり、水・食物・休息・保温などへの Needs は死活に関わるものの例である。愛されたいという Needs は、それが拒否されても個人は身体的に生存し続けることができるし、また場合によつては愛情の欠如が死の原因になるような例もある。Needs がその充足に接近しつつある時に、発達は一層よく調和的に進むし、発達可能性の実現も見込みがある。また Needs が極端に拒否されると、生活を狂わせ、フラストレートさせることになる。ある種の Needs は、それが充足されないからと言って生物としての生命が脅やかされることはないが、心理的に満たされた生活は不可能であるといえることがある。

承認への Needs は乳児にとつては余り問題にならない。乳児にとつて身体的な Needs が最も強いからである。しかし成熟した人は、やはり身体的な Needs を持つてはいるが、周囲から認められたいという願望を強く感ずる。Needs はほんの僅かでも満たされると、切実さや緊急度が弱まつて感じられる。例えば、友達から認められていると感じている青年は、承認への Needs を表わさないけれども、友達から遠ざけられている青年はその Needs を強く意識する。

ある仕事を為し遂げたいという Needs は、若い人々を忍耐強く懸命に働かせるが、老人にはそれができず、また若い人々の根気強さを笑うかも知れない。このように、ある年齢層には死活に関わる Needs でも、他の年齢層にとつては緩やかな誘導者に過ぎないことがある。また Needs の強さや緊急度は個人によつて異なるし、環境条件とくに社会経済的な階層によつて大きな差がある。Needs の性質は一般化することができるけれども、しかしもつと良く理解するために Needs そのものは青年の個人個人について研究されねばならない。

Needs の緊急度や強さは、個人の身体的能力・精神的能力・過去の経験によつて異なる。知的能力が低いために社会的 Needs が弱いことがあり、生殖腺が未発達なために sex drive が弱いこともある。甲状腺の活動減退のために、仕事を成就しようとする Needs が弱いこともある。また、ある Needs の充足が旨く行つた経験のある人は、その方向に大きな努力を奮い起すであろう。青少年を扱う人々は、彼等の Needs の差異や偏倚を知つておかねばならない。

食物・休息・運動への Needs は、個人が動き廻つたり成長するにつれて変化するのが普通である。愛情・成就・承認への Needs は、ある時期に幾分か満たされるだけである。そこで個人が持っている Needs は、常に充足を求めている路線にあつて、その種類は変りつつある、とすることができる。たとえ、ある Needs の完全な充足は不可能であろうとも、充足への接近がなければならない。

3. 行動の動因としての External forces

人間の行動は、その個人の Internal forces と External forces との相互作用に基いて構成される全体的な場面によつて規定される。この場合、Internal forces とはその個体の内部にある needs, anxiety, interest などであり、また External forces とは社会の requirement, 報酬・危険・脅威・他の人々の期待などである。これらの External forces とは、その個人の周囲にあつて直接間接に影響を及ぼしている Social milieu が内面化されたものと言ふことができる。すなわち、行動の動因は、その個人内に発生し方向性・選択性・始発性を持つた機能ないし力であるが、その動因を発生させる根源が個体の内部にあるか外部にあるかによつて Internal と External とに一応分けられるのである。

しかし注意しなければならないのは、個体の外部にある環境条件の全てが External forces となるのではなく、外部からその個体に働きかけて行動上の影響を及ぼしている心理的環境の力を指すのである。そして、そこには外的な刺戟が客観的に存在することも必要であり、その主体がこの刺戟に作用する能力をもち実際に認知し作用することが必要である。例えば、個人の周囲に危険や他人の期待が存在しても、当人がこれを認知することができず、また認知したとしても之に作用して活動への motive が始発しないならば、「盲者蛇に怖じず」「馬の耳に念仏」をするようなことになってしまう。子供たちが親や教師の教えを聞くこと (External force) とその教えを守り期待に添いたいという願望 (Internal force) とを一体化させないならば、その事柄に関する子供の行動は現われてこない。Internal forces は自我形成過程における外的刺戟の与え方によつて学習され形成されるのであるが、External forces は環境的諸条件と Internal forces との相互交渉によつて形成される。

最近の青年心理研究においては Internal forces に関する考察が多くなされている傾向があるけれども、現代の青少年は何故現在のような状態にあるのかを徹底的に究明するためには、是非とも External forces に関する諸問題の追求も忘れてはならないと考えられる。

4. Imperative needs を考察する理由

以上の三項で述べてきたような事柄は、現在までに日本で発行された多くの青年心理学書や心理学会・教育心理学会で発表された多くの研究資料を通覧する場合に、特にそれらとアメリカの文献や資料とを内容的に比較対照する場合に、強く感じられ反省させられることである。この違いの原因が奈辺にあるかはもつと高次の段階において討議されるべきであろうが、現在のところ筆者の及ぶ領域ではないと考える。

しかし現に、Cole, Garrison, Crow, Kuhlen, Bernard, Lindgren, Thorpe, Church, etc. の著書を読んで見ると、上述してきたような点が多く取扱われ考察されており、必ずしも彼等の全てが Imperative という用語を使っているわけではないけれども、之に類似した方向性を持つ考察や記述が多い。一方、日本でなされた諸業績の中にこのような傾向が全然ないわけではないが極めて少いようである。

既述したように、青年心理学の研究は単に「青少年はどのようにあるか」ということだけではなく、「どのようにあるべきか」を前提とした「どのようにあるか」でなければならぬと考えられる。従来、このような哲学と実践とが少なくなつたから、「青年心理学はどんな寄与をしているか」というような議論もなされるのではなからうか。このような立場の再検討が、現在の青年心理学界においては Imperative であると思われる。

Ⅲ 類似概念の考察

1. Maslow 等による Basic needs

従来多くの心理学者たちが人間の行動の根源としての Basic needs を論じており、Gates, A. I., Prescott, D. A., Thorpe, E. Symond, P. M. などは夫々異なる表現で分類しており、また Maslow, A. H. はそれらを最も基本的で生物的なものから最も高度で社会化されたものへと配列される hierarchy を構成すると述べている。Needs の意味については既に述べたが、之を一般心理学の立場から考察する場合と教育心理学の立場及び青年心理学の観点から講述する場合とは、普遍的・実験的な事実究明を主とするか、教育的ないし発達の意味づけを考慮に入れるかという点で差異があるべきは当然のことと言えよう。特に青年心理学においては、たとえ Maslow が Basic needs の発達の体系を

- ① Bodily processes
- ② Safety
- ③ Love
- ④ Status, acceptance by group
- ⑤ General adequacy, creativity, self-expression

と配列しているにしても、それらの感じ方や受取り方は青年個人の主観的条件及び客観的条件によつて著しい差異もあるが、多くは③④⑤に強く傾くであろう。しかし社会的・経済的に激動する時期や場所においては、②あるいは①さえも強くなることが考えられる。終戦直後の社会が異常に混乱した事態や戦場における異常行動などは、これらの典型的な事例と見ることができる。また、Prescott は自我的欲求・地位的欲求・統合的欲求と分けているし、Bernard 等は有機的欲求・心理的欲求・社会的欲求と分類しているのも、個人の精神構造の発達の变化と場面的構成に応じた機能的差異に基いたものと思われる。即ち、青年期にある者は自我的欲求や有機的欲

求はかなり充足されており、地位的欲求や心理的欲求が最も強く働きつつあり、そして統合的欲求や社会的欲求が次第に現われつつあると言えよう。このような点から、青少年個人を理解する方法として、彼にとつてどのような種類の Needs が最も強いかを知ることが重要なことである。そして統合的欲求や社会的欲求が強く現われる程度によつて、その個人の心理的成熟化の過程が判定されることになる。

これらの最終の段階においては、愛情・所属・社会的承認・自己実現など高次のものへの欲求であり、対人的な関係において発出するしまた充足されるものである。対人的・社会的なものであるから、その個人の周りにある人々（親・教師・友達など）や所属する社会（家庭・学校・友人集団・郷土・国など）からの期待ないし圧力を無視することはできない。

2. Cole による青年期の Specific problems

Cole によれば、人間は青年期の終り頃までに身体的な発育と知性的な発達とが概ね完成するが、それらに格別の欠陥がある場合にのみ成人並の大きさ・体型・機能に達することができず、また期待されるような知能的成熟に至ることを妨げられる。即ち、大変動が介在しない限り、この二つの側面の発達は生得的に規定される。従つて青年期の真の問題は、情緒・社会性、道徳性・経済生活に関するものである。

多くの青年たちは、12,3才から24,5才までの間緩やかな進度で自分たちの問題を解決してゆく。深刻なコンフリクトや強烈な反応傾向をもつ青年が、緩やかに順調に成長する青年たちよりも余りに印象的で芝居がかつていたので、一部の人々は青年期の「疾風怒濤」仮説を強調し過ぎることになる。標準的な個人の標準的な成長においては、僅かな変化が漸進的にスムーズに続きしかも臨時的・偶発的な困難を伴いながら、児童期が薄らぎ青年期が進み成人期が現われるのである。

児童は、環境に対して児童としての適応の仕方を以つて青年期にはいつてくる。彼の情緒的・社会的な順応が児童としては幾ら完全であつたとしても、それは成人生活においては適合しない。児童は標準的には、他の人々に依存的であり、異性に対しては殆んど関心がなく、情緒的にも金銭的にも自分の家族によつて支持されることを期待し、彼の判断は彼が尊敬する人々からの受売りであり、概括された一般的法則を扱うことに関心も持たないしまたその能力もない。青年期の終りには、情緒的にも実際的にも家庭を離れ、経済的に自分自身を支持し、自分の対人的接触を処理し、自分の心を決定づけ、自分自身の家庭を築き、表面的現象の背後にある一般的法則に携わるような用意を整えなければならない。

依存的な児童期から独立的な成人期への移行において、個人は多くの問題について満足な解答を見出さねばならない。それらの問題は、便宜上次のように人間としての関心や活動に関する八領域に分けることができる。

- ① 情緒的成熟
- ② 異性への関心の確立
- ③ 対人的成熟
- ④ 家庭の統制からの離脱
- ⑤ 知性的成熟
- ⑥ 職業の選択
- ⑦ 成人としての余暇利用
- ⑧ 行為の一般的原理への関心の確立

普通には如何なる青年でも、僅か数年の間にこれら全ての面で成熟を達成するようなことはない。子供の過去の状態が終生彼の心の中に留まることもあろうし、また幼児的な解決法や子供じみた行動が時折飛び出してくることもある。しかし青年は、人間生活における必要条件に適合する過程に第一歩を踏み出さねばならないのである。

即ち、Cole が挙げている青年期の特殊問題を考えてみると、学童期から生成発展しつつある存在としての青年期に注目して捉えていることと、現象学的に見た「問題点」として纏めていること、さらに行動の Internal forces に関するものだけが取上げられ Extevnal forces に関するものは殆んど省みられていないこと、などが特徴である。

3. Kuhlen による青年期の Characteristic needs

人々が今やつていることを何故為すのかの理由または原因は、部分的には彼等の生物学的構造に、また部分的には特定文化における生活過程の中で彼等が学習してきたものに見出される。新生児は、その生得的な反応傾向が生理学的緊張によつて誘発されるために、その行動が現われる。即ち、空腹・寒さ・痛みがある時に、目をさまし体をグズグズさせたり泣いたりする。気持ちがよくて満足している時は眠っているか静かに横たわつている。彼は次第に成長するにつれて、自分の欲求を充たそうとしてもつと特殊的で効果的な努力をするようになるし、また日常生活において自分の対人的・物的な環境との相互作用から学習するものより生ずる社会的な欲求や目的を發展させ始める。これらの獲得された動機や欲求は、子供が成長して青年になり成人になるにつれて次第に複雑なものになつてゆく。

Kuhlen は、このような観点から、青年期を特徴づける最も重要な動機や欲求と思われるものを次のように分類して論じている。

- ① 対人的な地位と受容への欲求
- ② 独立化への願望
- ③ 職業的・物質的な欲求
- ④ 行動規範と理想の固守
- ⑤ 理解と完全さへの欲求
- ⑥ 性その他の生物学的欲求
- ⑦ 動機としての習慣

しかし、このように別々に列挙し別個に論ずることは、全く遊離した動機が存在することを意味するのではない。動機とか欲求とか言うのは、結極は心理的実体である。行動の如何なる位相でも単一の動機で規定されるのではなくて、全体的な動機づけ場面によつて規定されるのである。ある種の動機は相互に強化し合うであろうし、あるものは相反するものもあろう。そして一個人にとつて重要な動機となつているものが、他の人にとつては殆んど問題にならないということもある。この原則が理解されるならば、青年期の主な欲求と思われるものを列挙することは、青年期の適応問題を研究する枠組を提供し、また特定の個人の動機について仮説を立てる根拠ともなるであろう。

要するに、Kuhlen は青年期を捉えるのに児童期から移行する時期という観点に立つことでは前述の Cole の立場と似ているが、彼は更に社会的学習や文化的影響力を強調しているという特徴を持つている。

4. Havighurst による青年期の Developmental tasks

生活は成長の質料である。個人の年令の如何に拘らず、もし自分の適応上の問題を旨く処理し

ようとするならば、ユニークな発達を成し遂げなければならない。発達の課題の概念は、人生の連続的な時期の各々における生活上の諸問題を説明するために公式化されてきたものである。Havighurst は、幼児・児童・青年・壮年・中年・老人たちが為し遂げなければならない課題の説明に積極的であつた。彼が公式化したものは、社会階層の影響を重視しているから、特に貴重である。

発達の課題は、同時期の効果的な適応過程のためになくってはならぬもの、そして個人を次の発達段階のために準備させる学習事項であり、従つて限られた時期の間に達成されねばならない学習内容である。発達の課題は、その個人の心理的特質、生理的特質、及び文化的 milieu から生ずるものであり、前述したような青年の欲求を構成している。

そして Havighurst が指摘している青年期の発達の課題は次の通りである。

- ① 同年輩の男女との洗練された新しい交際を学ぶこと。
- ② 男性として、または女性としての社会的役割を学ぶこと。
- ③ 自分の身体の発達を理解し、身体を有効に使うこと。
- ④ 両親や世の大人から情緒的に独立すること。
- ⑤ 経済的な独立について自信をもつこと。
- ⑥ 職業を選択しその準備をすること。
- ⑦ 結婚と家庭生活の準備をすること。
- ⑧ 市民として必要な知識と態度を発達させること。
- ⑨ 社会的に責任ある行動を求め、そしてそれを為し遂げること。
- ⑩ 行動の指針としての価値や倫理の体系を学ぶこと。

Havighurst や Mc Cleary など発達の課題を考察する人々は、児童→青年→壮年という連続的な過程を考えながらその一段階としての青年期を捉えており、また社会的環境からの期待ないし圧力を大きく考慮に入れていることが特徴である。現実の人間生活を考えるならば、健全で実際的な立場であると言える。

5. 以上の纏め

前項までに考察してきたように、青年期の捉え方や発達の意義についていろいろな考え方があり、それらには多くの共通点や類似点を含みながら幾らかの差異が認められる。特にその差異は青年期を脱した後の生活過程における適応問題と彼等の周囲からの社会的期待とについて観点の相違であると言えることができる。発達の課題の概念をもつと実践的・教育的な立場から展開させることが望まれる。そこに、本稿の首題である青少年の Imperative needs について考察される所以がある。

II 青少年の Imperative needs

青年期の Basic needs, Specific problems, Characteristic needs, Developmental tasks などについての研究は、青年及びその心理的な諸問題をよりよく理解するための夫々のアプローチである。そして更に、青少年が包蔵している諸問題についてのもう一つの見方は、彼が現在及び将来の時点において個人生活でも集団生活でもよりよく適応した状態を保持し発展させるために、彼が是非とも習得してゆかねばならないもの（これを Imperative needs 「不可避的な必要体」と名づける）を考察することである。そしてこれは、発達の課題よりももつと実

践的・教育的であり緊要度を高めた概念であると言える。この立場は Bernard によつて紹介されているけれども、学校教育法の小・中・高校における教育目標とも密接な関連をもつものである。以下このような needs について述べることにする。

(1) 社会で需要のある技能を發展させること

すべての青年は、世の中で需要のある技能を發展させ、経済生活において理性的で生産的な勤労に参加し得るような分別と態度を發展させることを必要としている。そのため、彼等は技能教育を受け職場の知識を持つと共に、よく監督された作業体験をしておくことを必要とする。このような needs (必要体) を満たすために、学校においては作業体験を含む職業技術教育が実施されねばならない。

親・教師・青年指導者たちは、地域社会の各職場において如何なる性格特性や生活態度が望まれているかを調査研究して、教育期間中に之を習得させるように導かねばならない。多くの職場では、(1)時間厳守の習慣、(2)極り切つた仕事や無報酬の作業を進んでやること、(3)頼み甲斐のあること、(4)指示をよく聞き入れること、などが強調されている。自分の責任を遂行する意欲、他人の仕事や業績を尊重すること、経験実績のある人から学び取ることの熱心さ、などは青年たちが發展させねばならない態度である。集団生活に受容され適応する能力は何よりも真先に大切である。礼儀正しさ、親切、さつぱりした服装、他人の発言を聞き入れる技能などは、集団内で受容される上に重要な要素である。社会から需要のある技能や望まれるパーソナリティ特性は、集団や職種によつて差のあることに注意しなければならない。

(2) 身体的・精神的に良い健康を發展させ保持すること

良い健康の大切なことは今さら贅言を要しない。勿論それがためには成人たちの忠告や指導も重要な役割をなしているが、青年自身がこの必要を満たすために大きな責任を持たねばならない。身体的・精神的に良い健康は、自分自身に対する個人の態度に依存することが大きい。人間は誰でも、最大の發達をなし得る者として自分自身を受け容れるべきである。家庭は、児童青年の安定感を發展させるような機会を与えて彼等を受容することによつて、その役割を果している。また学校は、悪を拒み善を奨めるような幅広い機会を与えることによつて、生徒が自分自身を価値ある存在・發達主体として受け容れるように援助している。さらに地域社会は、少数集団の見世物的な行為を過度に重視することなく、もつと積極的な寄与をすることによつて青年たちが住民全体の重要な分節であることを示さねばならない。要するに、家庭と学校との健康指導上の位置は焦点的であるが、児童青年の精神的・身体的な良い健康はその個人の責任であると同時に、全体としての社会の構造と志向の結果であり、全体的な文化に関わる問題である。

(3) 公民としての権利と義務を知つて之を履行すること

すべての青年は、現代の社会における公民としての権利と義務を理解し、地域社会の一員としてまた国民の一人としての義務を果すように努め、また自分の国や国民について良く理解することを必要としている。法律的には青少年が特定年令に達すると一市民となるが、機能的には社会の諸問題において利害関係を經驗することによつて次第に有能な公民性を身につけるようになってくる。家庭内での発言、生徒自治活動への参加、青年集団での責任遂行、学校での勉強(歴史・倫理・社会・経済・法律など)、地域社会の施設での執務体験などは機能的な公民性を養う上に基本的な要素であると思われる。

(4) 家庭生活の重要性を理解すること

すべての青年は、個人及び社会にとって家庭の有する重要な意義、円満な家庭生活をもたらす諸条件について理解することを必要としている。個人のパーソナリティと行動傾向性は家庭集団によつて方向づけられることは、広く知られている心理的事実である。もし万一家庭が存在しないとするならば、人間という動物は多くの人間独自の特性を失つてしまうであろう。家庭生活及び家族制度の安定性を脅かすような全ての企図は、同時に社会の基本的な構造を脅かしていると言える。離婚・別居・性的乱交などは、脆弱な家庭生活の原因となるし、またそれらの結果である。家庭及び学校での指導や勉学は、これらの脅威が有害であることを知らしめることに向けられねばならない。

家庭生活の重要な意義を青少年に再認識させるためには、さまざまな手段や方法が講じられねばならない。その最も基礎的な方法の一つは、家庭や近隣社会において健全な青少年少女たちの交友関係を促すように努めることである。また男性や女性の遊びとか交際の仕方について一部の親や教師がもっている態度を変えることも必要であろう。青年は、自分たちの身体的な発育と社会性の発達に関する問題点を研究して見ることも必要である。このような研究の指導監督は、健全な方向をもつ親や青年指導者によつて為されなければならない。また家庭問題や男女関係についての不健全な私見を聞く場合は、その発言者の背景的経歴や意図を考えながら用心することが肝要である。

(5) 物品の買入れ方や利用法を知ること

すべての青年は、物品を上手に買い求めそれを利用する方法を知り、消費者が受ける恩恵と消費行為がもたらす経済上の影響について理解する必要がある。毎年尨大な金額の広告費用が消費者の購買力を駆り立てるために使われているが、経済組織の諸活動における一般労務者の役割と機能については殆んど理解されていない。物品の購入と利用は確かに人々の普遍的で重要な活動ではあるが、それらの蔭で働く人々の助力がなかつたならば随分面倒なことになるであろう。青年たちも他の人々の助力を得ることによつて、自己実現と社会的有効性に接近しつつある成人になつてゆくのである。

習慣・知識・態度・技能などの固執的な役割は、統制と指示とによつて変り得る心理的要素として認められねばならない。親と教師は、現在及び将来において最善なるものを青年たちに教えるよう心掛けねばならない。学習したものと教示されたものを単に転移させるだけでは不十分であつて、実例を示して知識を利用する方法を教えなければならない。青年たちは親や教師の監督の下で、物品の選択・購入の仕方、資金の使用計画や管理について実習をすることも将来の生活のために必要である。

(6) 科学の研究方法とその関連事実を理解すること

すべての青年は、科学の研究方法、人間生活に及ぼす科学の影響、世の中や人間はどんなものかについての主な科学的事実を理解する必要がある。このことは、産業・技術・医学・社会文化の進歩を促進させるための厳然たる課題である。科学的知識は哲学的価値から機能的に遊離されるべきではないことも認めなければならない。

この必要を成就させる代表的な方法は次のようなものである。人間生活の特質と価値を重視する正統な (formal) 研究、教室での研究問題へ科学の応用、科学的研究方法の手続きの紹介・教示、見学旅行によつて科学利用の説明など。研究領域は広範囲であり違つていても科学的方法

の段階は共通であるから、適切に企画され記述された図書を多くの研究領域に供給することが望まれる。こうすることによつて、領域によつて異つた関心の違いは纏められ、科学を重視することの共通性が保たれるであろう。

(7) 美的鑑賞力を発展させること

すべての青年は、文学・芸術・音楽・自然などにおける美しいものを鑑賞する能力を発展させる機会を必要としている。この必要体は實際上二つの側面を持つている。すなわち、鑑賞と表現である。しかし表現については次の余暇利用の項で述べることにする。種々の美術工芸品を鑑賞することは、世の中を異つた展望から見、世の中についての自分の知覚を拡大させることになる。日本の伝統における彫刻・書・庭園などの美しさについても同じことが言える。

学校のカリキュラムの中にも美的鑑賞を指導するような活動を含めるべきであろう。しかし、今日では、知識の蓄積と社会生活への準備が重視され過ぎているために、このような情操教育の影が薄れているのが実情である。生き甲斐のある生活とは精神的にバランスのとれた生活であるということをもつと広く普及させるべきである。美を鑑賞しようとする心構えは余暇の建設的な利用よりももつと大切であることを、親も教師も心に深く留めておかねばならない。

(8) 有益な余暇を創造すること

すべての青年は、彼等の余暇をよく利用することができ、自分自身に満足をもたらす活動と社会的に有用な活動とを調和させることを必要としている。一人一時間当りの生産高が増大し就労日数が次第に縮小されるにつれて、この必要はいよいよ大切になつてくる。家庭内の労働節約は主婦にとつて時間節約の問題と関連して、節約された時間をどのように利用するかという新たな問題を提起する。余暇を映画やテレビの視聴に用いるのは有害ではないけれども、そこに心理的に建設的なものは見出されない。傍観することは受動的な活動であつて、余暇の創造的な利用ではない。

青少年非行は余暇の利用法の不適切さから生ずるとさえ言うことができる。社会的に有用な余暇の利用法を教えることは、青少年指導上の明白な出発点である。否定すべき行為を回避させるよりも、余暇を建設的に利用することを推奨すべきである。それは個人の生活に意味と活力を附加する一つの手段でもある。余暇の建設的な利用というのは、単に時間を無事故で過すことではない。全体的な問題の重大さは、親・教師・青年指導者・司法関係者・行政当局・報道関係者などが集つて慎重に討議されるべきである。

(9) 他の人々に対する尊敬の念を発展させること

すべての青年は、他の人々に対する尊敬の念を発展させ、倫理的な価値観と原理について洞察する力を伸展させ、他の人々と協調的に生活し働くことができ、人間生活における道徳的・宗教的な価値観を高めてゆく必要がある。シェクスピアも述べているように、他人を尊敬することの始まりは自分自身を尊敬することである。

This above all: to thine own self be true,
And it must follow, as the night the day,
Thou canst not then be false to any man.

(Hamlet. Act I, Sc. 3)

殊に大切なのは、自己に対して誠実であれ、
そうすれば夜が昼に伴うように、
勢い何人に対しても誠実ならざるを得ないだろう。

(沢村寅二郎訳：ハムレット、研究社)

青年たちが他の人々を尊敬するように援助してやる人々は、まず最初に青年たちを尊敬しなければならない。また若い人たちは、実際に仕事を為し遂げること、他人から好かれること、心理的に独立北すること、安定感を持つことによつて、自分自身の自我の地位 (Ego status) を確立しなければならない。しかし、倫理的な価値観は簡単に吸収されるものと考えてはならない。これらの価値観について多の人々と討論し、多くの図書を読み、指導助言を得ることによつて、自分の考えを確立するようになるまでには長年月を要するであろう。

(10) よく考え、話し、読み、聞く能力を向上させること

すべての青年は、物事を合理的に考え、自分が考えていることをはっきりと表現し、読んだり聞いたりしたことをよく理解することを必要とする。この必要は特に、地域社会や国家の問題を通達され討論するような集会において大切である。家庭や学校においては指導や管理の根本方針がずっと以前に定まっているのだから、この必要は余り満たされることが多い。ある問題について質問される時や、暫定的な結論を出すために適切な情報を求められる時には、この必要が重視されてくる。

思考の基礎は多くの事実を知っていることであるが、これらの事実というのは結論に至るための手段であり素材である。教師や親たちは、青年をしてできる限り感情や偏見を入れないで問題を処理させねばならない。聞き方や判断の仕方の技術は、適当な時期に練習を通して強調されるべきである。青年集会や学級活動では、自由な表現力を向上させる試みとして討論形式の方法がよく採用される。作文や話し方における文法上の誤りは、彼等の自発的な表現という点から見れば二次的な問題である。

V 討 論

(1) Imperative needs の捉え方について

Basic needs については従来多くの心理学的な研究があり、特に青少年個人のそれを捉えるのに三好稔が作成したような基本的欲求検査が用いられる。青年期の Specific problems や Characteristic needs を捉えるためには、彼等の悩みについて調査し、質問紙法や投影検査、日記・作品の分析などが有効であるとされている。Developmental tasks は彼等の個体的条件(心理的・生理的)と文化的条件とが広く考察されなければならない。

Imperative needs を捉える場合は、以上の研究結果を背景としながら、さらに親や教師の意見聴取、上級学校や各職場における新入者の不適応問題の観察・分析、青少年非行の事例研究などの結果を総合し、特に家庭・学校・職場など体制化された集団から青少年に期待されているものに注目する。勿論、社会的な期待と言つても青少年個人の精神的健康を無視してはならないが、それも長期的な視野における適応生活を重視するのである。社会や集団の中で受容されると共に自己形成や自己実現のためにも重要な要素である項目や立場を強調するわけである。

(2) その指導実践について

ここで取り上げた Imperative needs というのは、小学校においても中学校や高等学校においても重視されている教育内容を含んでいる。学校教育法によれば、中学校における教育目標を次のように規定している。

- ① 小学校における教育の目標をなお充分に達成して、国家及び社会の形成者として必要な資質を養うこと。

- ② 社会に必要な職業についての基礎的な知識と技能，勤労を重んずる態度及び個性に志じて将来の進路を選択する能力を養うこと，
- ③ 学校内外における社会的活動を促進し，その感情を正しく導き，公正な判断力を養うこと。

之に基いて学校での教育が実施されているけれども，社会思潮や教師の価値観・生活態度を反映して教育成果に多くの差異が生ずるのは免れ得ないことであろう。アメリカにおいてはカリキュラム編成の時に

Education of Citizenship
Education for Home Life
Pre-marital Education
Vocational Guidance for Adjustments

などが適切に組み入れられ，その実施に当つて社会生活や集団生活への理解と適応を目指していることは，日本及び沖縄の教育界において大いに参考とすべきであろう。自分の所属する集団や社会に対して批判的態度を持たせることは必要な場合もあるが，それは建設的な意味での適応生活を目指したものでなければならない。

Ⅵ 結 語

青年期の心理学的研究は如何にあるべきか，如何なる価値的方向づけをなすべきか，については多くの異論が予想される。個人及び社会の健全な発展を目指すことが学問研究の目的であるとするならば，客観的事実の究明にしても内外古今の文献研究にしてもそれらの進むべき方向は明瞭である。

現在どこの社会でも青少年問題が大きな関心を集めているが，その問題解決の盲点とも言うべきものの一つは，彼等の **Imperative needs** の軽視またはその指導実践の不適當さであろうと思われる。高等学校の教育課程の中に「倫理・社会」が設定された所以もここら附近にあると解されよう。青少年の **Imperative needs** の捉え方や指導方法については異論もあるので多くの関係者が討論する必要はあるが，その **needs** そのものを不必要とすることは教育指導を偏頗なものにする結果になると思われる。

参 考 文 献

1. 大西憲明：わが国における最近の青年心理研究の方向，心理学評論，Vol.1, No.2, 1957.
2. 大平勝馬(編)：青年心理学，日本文化科学社，1961.
3. 岡本重雄，津留宏：青年期心理学，朝倉書店，昭32.
4. 黒田正典：欲求の概念，特にその価値的の性格の問題，教育心理学会第3回発表，1961.
5. 高橋有己：文沢義永，富本芳郎，芳賀純：教育心理学概説，評論社，昭38.
6. 徳田安俊：発達課題による心理的成熟の評価，福島大学学芸学部論集9号の2，1958.
7. 豊沢登，平沢蕉：青年社会学，朝倉書店，昭28.
8. 津留宏：成人特性の発達——青年期の終期測定の研究：I，教心研11巻4号
9. 文沢義永：青年期の発達と適応，浅野印刷，昭38.
10. 三好稔(編)：基本的欲求検査手引，東京心理出版
11. 依田新：青年心理学，培風館，昭38.
12. Ausubel, D.P. : Theory and Problems of Adolescent Behavior, 1954
13. Bernard, H.W. : Adolescent Development in American Culture, 1957.

14. Cole, L.: Psychology of Adolescence, 1958.
15. Cole, L. E. : Human Behavior, ; Psychology as a Bio-Social Science, 1953
16. Cruze, W. W. : Adolescent Psych and Development, 1953.
17. Garrison, K.C.: Growth and Development, 1952
18. Horrocks, J.E. : The Psych of Adolescence, 1951.
19. Havighurst. R.J.: Human Development and Education, 1953.
(庄司雅子訳: 人間の発達課題と教育, 牧書店, 昭33.)
20. Kuhlen, R.G.: The Psych. of Adnlescent Development, 1952.
- 21 Kuhlen, R.G. (ed) ;Psychological Studies of Human Development, 1962.
22. Landis, P.H.: Adolescence and Youth, 1952.
23. Lindgren, H.C.: Educational Psych. in the Classroom, 1956.
24. Lindgren, H.C.: The Psych. of Personal and Social Adjustment, 1953.
25. Seidman; J.M.(ed.): The Adolescent: A Book of Readings, 1953.
26. Symonds, P.M. : From Adolescent to Adult, 1961.
27. Vaughan, W.F.: Social Psycholoyg—The Science and the Art of Living Together, 1948.
28. Young, K.: Personality and Problems of Adjustment, 1947.

On the Imperative Needs of Adolescents

Yoshinaga Fumizawa

1. Approaches to a better understanding of the nature of the adolescent and his problems are the studies of basic needs, specific problems (Cole, L.), characteristic needs (Kuhlen, R. G.), developmental tasks (Havighurst, R. J.), and further importance from socio-psychological and educational points of view may be the imperative needs of adolescents (Bernard, H. W.),
2. Those similar concepts are introduced and considered from the stand-point of psychological study of adolescence. Each terminology should be interpreted somewhat differently in those views between of general psychology and of educational psychology.
3. The important look of some of problems of adolescents is summarized as their imperative needs, which are as following,
 - (1) Developing saleable skills
 - (2) Developing and maintaining good physical and mental health
 - (3) Knowing and acting the rights and duties of a citizen
 - (4) Understanding the significance of the family
 - (5) Knowing how to purchase and use goods
 - (6) Understanding the methods and implications of science
 - (7) Developing appreciation for beauty—music, nature, art, and literature
 - (8) Creating useful leisure time
 - (9) Developing respect for others
 - (10) Improving ability to think, talk, read, and listen.
4. The study of the imperative needs may be criticized mostly because it is outside topic of the traditional area in the "psychology of adolescence", But the writer believes, the "psychology of adolescence" should deal with not only the scientific study of adolescent psychology but also the psychological approach to the adolescent problems including the internal forces and the external force of their development and behaviors. The external forces are stressed by him as urgent problems for guidance.